

辛抱とは、誰のための、何の為のものなのだろうか？

先日、NHK 教育 TV で約 3 時間の討論番組「今だから聞きたい！ 障害者が社会に伝えられること」が放送された。

その中で本質論に迫った、いわゆる「心のバリアフリー」に関する体験談に、自分はウンと今も考えさせられ続けている。

その体験談とは、人工呼吸器装着の筋ジスの青年がクラシック演奏会に行った。周りの観客一人が係員を呼び、「人工呼吸器の音が煩い」と伝え、係員は青年に「周りの方が迷惑しているから」と青年にメモを見せ、青年は結局途中で退席を余儀なくされたとか。

他の人の体験談では、車いすの青年がよくコンサートに行くが、時には、周りの観客のスタンディングしての声援。結局、ステージは見えず、音だけを聞くしかなかったこともあるとか。

さて、こうした時、「観客の一人である自分であれば、どう行動するか？」が話題になった。人工呼吸器は、青年にとっては生命維持の息をする手段だからと理解し、高価なチケット料での観賞に拘わらず少々の呼吸器の音を辛抱するか……。

会場により障害者用の席が確保されつつあるが、未整備の会場なら、周りの聴衆に迷惑をかけるから、人工呼吸器や車いす等の方はコンサート等に行くことを辛抱するのか……。

一方が辛抱するだけでは、互いの真の理解に繋がらないだろうし……。

「辛抱」とは、誰のための、何の為のものなのだろうか？

体験談は象徴的な問題提起であり、「共に生きる」というスローガンをよく見聞きするが、日常の具体的状況で「共に生きる社会」とは自分たちはどう考え、どう行動するかが問われているように思う。

確かにハード面でのバリアフリーは進んでいるが、目に見える表面的なことだけでなく、本音の心情面でも互いが辛抱することのない「心のバリアフリー」構築のために、障害のある、なしに拘わらず、まず双方の一人一人が考え、取り組まなくてはならないことは、何なのだろうか。

体験談に照らし、みなさんがコンサート会場の観客の一人であった仮定の上で、「心のバリアフリー」についてのご意見をお聞かせください。

(2006 年 12 月 6 日 記)